

本書について

◆この教科書のレベル >>>>

この教科書は、受け身形、使役形までを含む基本文法と100字程度の基本漢字の習得を終え、初級レベルの四技能を一応身につけた学生を対象としている。ウィスコンシン大学でいうと、一年のコース(240時間)を終えた者ということになる。ウィスコンシン大学は割合恵まれていて、一、二年の日本語が週8時間のコースなので、この教科書を二年の初めに始めて、各課に2週間かけると、だいたい一学年(30週)で全15課がちょうど完了する。一、二年のコースが週5時間しかない大学では、この教科書を二年の後半から使って下さってもよく、また第三学年にかかってもやむを得ないと思われる。

◆改訂について >>>>

1. 大学生の発話は、なるべく今の若者の発話に近くするように気をつけた。特に、文末表現は、女性的／男性的な表現を避け、中立的な表現にするように努めた。
2. 会話と読み物で、内容が日本の現状とずれるところは、新しいデータなどを取り入れて刷新を試みた。特に、第5課の日本の高校生・大学生に関する記述、第14課の女性に関する新聞記事は大幅に変えた。他の読み物も、大幅ではないが、現状と合わない記述は訂正した。会話では、第7課の会話2、第9課の会話1、そして第14課の会話2・3は完全に新しくした。
3. 第15課は、すべて新しく書きかえた。会話の機能も「インタビューする」というもので、会話は実際のインタビューに基づいている。読み物には「Coolな日本」「『きまり』だらけの日本、『きまり』のないタイ」という記事を選び、外から見た現代の日本を話題にしている。
4. 各課に「会話練習のポイント」という項目を新しく作った。会話練習のポイントは、各課の会話の機能に沿った練習をするための会話の枠組みを示すもので、会話を練習する際の手助けとなる。なお、この項目を設けることに関しては、この教科書(旧版)に準拠して作られた副教材集(2001年、岐阜大学留学生センター発行)に、そもそものヒントを得ているので、ここに記しておきたい。
5. 文法ノート、文法練習を増やし、文法練習は、教室作業と並行して行いやすいように、テキストとは別に設けたワークブックに収録した。文法練習には、似たような文法表現、例えば、「ことになる・ようになる」「ために・ように」「よう・そう・らしい」などの練習も含めた。
6. ワークブックには文法練習のほかに、読み物の内容質問と、各課の「書くのを覚える漢字」を練習するための漢字シートを取めた。

7. 音声教材は、すべての音声を新しく録音し直し、CDに収録して、テキストに添付した。各課とも、「会話」「聞き取り練習」だけでなく「読み物」も収録してある。
8. 教材の専用サイトを設けて、この教材を使って教える上で役に立つ教材や情報を提供する。このサイトから漢字シートをダウンロードすることもできる(2008年秋開設予定)。

◆この教科書のねらい >>>>

1. この教科書の基本的な目標は、**中級レベルの学生の間・話・読・書の四技能を並行的に伸ばす**ことにある。その目標に従って、次の諸点に心がけた。
 - a. 各課の中心に会話と読み物とを置き、また各課の最後には、速読用の読み物も設けた。
 - b. 書く練習としては、文法練習以外に作文も含めた。
 - c. 各課に、聞き取り問題を入れた。
2. 第二に、この教科書は、**現実的な内容と機能、そして自然な日本語を教える**ことを目指し、そのために次の諸点に留意した。
 - a. 各課で、コミュニケーションに必要と思われる機能(紹介する、誘う／誘われる、など)を導入した。そして、その会話の練習がしやすいように、会話練習のポイントとして、各課の機能をハイライトした会話の枠組みを示した。
 - b. 会話を自然なものとするように(例えば、会話が書き言葉で行われたりしないように)気をつけた。また会話のスタイルも、「デス・マス体」のほか、「ダ体」や敬語などを適宜混ぜてある。
 - c. ワークブックに収録した「文法練習」は、置き換えドリルなどの機械的なものを避けて、考えて答えるものを中心とし、会話練習的なものも多く含めた。
 - d. authenticな日本語を示すという意味で、最後の5課分(第11課～第15課)の読み物には生教材(エッセイ、新聞記事など)を使用した。
 - e. 各課に、「運用練習」の名でcommunicativeな練習をつけ、ペアワークや小グループワークにより、学生が積極的にコミュニケーション活動に参加できるようにした。

3. 第三に、この教科書は、**これを使う外国人学生の日本に対する理解を深める**ことを目標とし、そのために次の諸点に心がけた。
- a. 初めの3課を除き、残りの12課は、留学生の日本での生活を題材とし、特に最後の2課では、現代日本の社会・文化問題を扱った。
 - b. 各課に英語でCulture Notesをつけた。
 - c. 「速読」では、原則として、広い意味での日本文化(日本人の考え方、習慣など)を題材にした。
 - d. 各課の終わりに、ことわざや俳句をつけた。

◆漢字使用について >>>>>

漢字の使用は、比較的自由なものとした。中級の教科書には、教育漢字を全部導入することを目的とするものが目立つが、そのやり方は意識的に避けた。教育漢字と言っても、使用頻度の高いものから低いものまであるし、教育漢字を全部公平に導入するという立場を取ると、そのために無理な単語を導入したり、不自然な文を入れてしまったりする羽目に陥る。現に、現在市販されている中級教科書の中には、その例が多く見られる。また、大学生の生活に関係の深い漢字や日本文化に密着した漢字ならば、たとえ教育漢字に含まれていなくても、当然導入すべきだと考えられる。そもそも日本の漢字は、一つの字に一つ以上の読み方があるのが普通だから、漢字をいくつ導入したという考え方は、あまり意味がない。したがって我々は、漢字の使用に関しては、常識と柔軟性を第一として、数には捉われないようにした。また、導入漢字のすべてが書けるように要求するのも、無謀かつ無意味に近いと考えられるので、各課の導入漢字は、「書くのを覚える漢字」と「読めればよい漢字」とに分けた。この教科書は、アメリカの大学の日本語の学生が二年のコースを取りはじめる際に、一年度で習って覚えている漢字は多分100字程度であろうという前提に立っている。そして、二年のコースでは、そのほかに、書ける漢字と読める漢字を合計700~800ぐらい覚えてもらえば十分という立場を取っている。

◆この教科書の使い方 >>>>>

1. Culture Notes

Culture Notesは、各課に入るに当たって読ませておく。その内容については、教室で質問して理解度をチェックするとよい。

2. 会話

会話はCDで聞かせ、クラスでも練習させる。比較的長い会話が多いので、全部を暗唱させるのは難しいと思われる。暗唱させたい場合は、会話をいくつか切って覚えさせるか、一番役に立ちそうなところ(例えば、各課の会話練習のポイントとして提示されている部分)を覚えさせるのがいいだろう。要は、どういう場合にどう言うか、相手にどう言われたらどう答えるか、ということであって、会話の人物と一言一句同じ発言をする必要はない。教師は学生の言葉をよく聞いて、誤りのない限り、ある程度のvariationは許容すべきだろう。

3. 読み物

単語表を使って予習してこさせる。クラスでは音読させ、意味を説明し、問答によって理解を確認する。宿題として**ワークブックの内容質問**に答えさせる。

4. 単語

単語表には、各単語にふりがながつけてあり、アクセントも示してあるが、会話や読み物に入る前に、そこに出てくる単語の発音練習をさせておくとよい。

5. 漢字リスト

「書くのを覚える漢字」は、**ワークブックの漢字シート**で書く練習をさせる。「読めればよい漢字」は、その名の通り、読めるようになればよい。書く漢字も、読む漢字も、教師は教室でフラッシュカードを使って読ませながら、意味の理解の定着をはかる。時間の許す限り、漢字テストをするのがよい。ただしテストでは、個々の漢字が書けたり読めたりすることだけを調べても、あまり意味がない。漢字テストの問題は、漢字の意味が分かっているかどうかを調べる問題にすべきである。例えば、「大学の先生のオフィスは〇〇室という」という文を与え、〇〇の中に「研究」と書かせるようにする。こういう問題を作るのは、けっこう時間がかかるが、学生には親切だろう。

6. 漢字の部首

この本では、基本的な部首を導入するに留めたので、このくらいは学生に覚えさせてもいいだろう。「『待(つ)』という漢字はどう書きますか」と聞いて、「『ぎょうにんべん』に『てら』です」と答えさせる程度の練習をするといいと思う。

7. 文法ノート

文法ノートは、自習用に作られている。原則として、次回に教える予定の会話または読み物の範囲に出てくる文法項目を予習させる。また、クラスで例文を音読させて、問答により学生の理解を確かめる必要もあろう。紙面の関係上、例文は一項目あたり3つぐらいに留めたが、少ないと思われる場合は、クラスでの練習の際に適宜補っていただきたい。

文法ノートの項目中、特に練習させたいものは、**別冊のワークブックに「文法練習」**が収められている。文法練習は、クラスでカバーした本文の範囲に合わせて口頭練習をさせたのち、宿題として課し、提出させる。

8. 運用練習

運用練習には、いろいろな教室作業が出てくるので、それを全部同じ日にするのは避け、本文でカバーした内容や機能に合わせて、少しずつ行うようにするとよい。ロールプレイや小グループワークをする場合には、まず質問の練習などをさせてからの方が効果がある。作文も同様で、例えばアルバイトについて書かせるなら、クラスで話し合いをしてから、宿題として出す。

9. 聞き取り練習

これは、宿題としてCDを聞かせ、問題をやらせておく。クラスでは、答え合わせをするだけでよい。だいたい○×式なので、答え合わせには時間をあまりかけないで済む。○×に関して学生の意見が分かれた時や、内容について質問が出た場合などは、クラスでもう一度CDを聞かせてもよいが、それが癖になると、学生は当然のことながら、宿題をやっただけでなくなってしまうので、学生を信頼して、クラスでは原則として答え合わせだけにするのがいいだろう。

10. 速読

これは、試験や成績に関係なく、ただ読んで楽しむためのものなので、クラスで読ませ、答え合わせをする。教師は学生の質問には答えるが、教室で音読させるなどの必要はない。

11. ことわざと俳句

ことわざも俳句も、意味を説明して音読の練習をさせ、暗唱させるのがよい。これを試験の範囲に入れるかどうかは、全く担当教師の自由だし、この本のことわざや俳句が気に入らない方は、適当なもの置き換えて下さってもよい。